

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370452

研究課題名(和文) 日本語危機方言アクセントの再調査による研究の深化

研究課題名(英文) Deepening the study of accent in endangered Japanese dialects through further research

研究代表者

上野 善道 (UWANO, ZENDO)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：50011375

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：(1)徳之島浅間方言のアクセント体系は、通説のN型アクセントと違い、全体の形を問題とする4つのパターンと1つの上げ核からなる多型アクセントと解釈した。(2)与論島諸方言も、全島が昇り核による多型アクセントであることを明らかにした。(3)喜界島中南部諸方言は、地名や外来語の調査の結果、3型アクセントであることが明らかになった。(4)3型アクセントを基本とする与那国島方言は、類別語彙、複合語、動詞活用形にまで調査を拡張して詳しい報告をした。(5)複合名詞とその前部要素との間に式保存が成り立つか否かに関し、伝統的方言複合語と生産的新複合語との関係が大きく6つの類型に分けられることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：(1)The accent system of the Asama dialect in Tokunoshima is interpreted as a multi-pattern system with four tonal patterns and one raising kernel, contrary to the prevailing view of an N-pattern system. (2)All the dialects on Yoron Island are also found to have a multi-pattern accent system with an ascending kernel, against the traditional view of an N-pattern system. (3)The central and southern dialects on Kikai Island are reinterpreted to have a three-pattern accent system, based on the survey of place names and foreign words. (4)As for the Yonaguni dialect, which basically has a three-pattern system, the accentual data of the word-class vocabulary, compound nouns and inflectional verb forms are reported in detail. (5)Concerning the feature-preserving rule between the compound nouns and their first members, six subtypes are found through a typological study between traditional compounds and productive compounds in a number of Japanese dialects.

研究分野：言語学・音声学

キーワード：多型アクセント N型アクセント 複合名詞 式保存 徳之島方言 与論島方言 喜界島方言 与那国島方言

1. 研究開始当初の背景

日本語諸方言アクセントの研究は、全体的には進んでいる方であるとは言え、少し詳しく考察しようとするとも資料の少なさ、不確かさにすぐにぶつかる。共時的なアクセント体系の解明さえまだまだの方言が多いのが現実である。

その一方で、日本語アクセント祖体系の研究にとっても極めて重要な研究価値の高い方言が、話し手の高齢化・減少とともに消滅の危機に瀕している。

この状況に鑑み、重要度・危機度の高い方言を中心に今のうちに調査を進め、研究を深化させることが緊急の課題であると判断した。

2. 研究の目的

上記の状況において、次の3点を大きな目的とする。

(1) 日本語諸方言の中でも研究価値が高く、かつ消滅の危険度が高い方言(これを「要地方言」と呼ぶ)を再調査することによって、その体系と仕組みを明らかにする。これによって、アクセント論一般に貢献することを目指す。

(2) 調査に際しては、掛け替えのない貴重な音声を録音保存して将来に備える。

(3) 特に琉球方言に関する比較研究を進め、私自身がこれまで提案してきた本土アクセント祖体系との間の比較研究によって再構築する日本祖語アクセント体系を考察する手掛かりとする。

3. 研究の方法

(1) 要地方言につき、話者に会って実地調査をし、類別語彙に限らず、各種の複合語や活用形まで聞いて、広く資料を収集する。

(2) その結果を、可能な限り発表の場を利用して資料公開する。

(3) それを元に、琉球方言祖体系アクセント、さらには日本語祖体系アクセントの研究を進める。

4. 研究成果

(1) 主として琉球諸方言について、喜界島、徳之島、与論島、久米島、与那国島のアクセントを調査研究し、そのほとんどのアクセント体系を解明するとともに、多くの資料を集めて琉球方言祖体系考察の基礎を作った。

(2) 喜界島方言は大きく中南部諸方言と北部諸方言に分かれるが、その両方言について、片や中里、坂嶺、上嘉鉄、片や小野津、志戸桶、佐手久の諸方言を詳しく調査した。

中南部方言に関しては、これまで私自身が

長いこと2型アクセントとしてきたが、地名語彙や外来語を詳しく調べることにより、「3型アクセント」であることが明らかになり、それについて複数の報告をした。

もともと3型アクセントと位置付けてきた北部諸方言についても多くの資料を集め、現在さらに分析を進めている最中で、近く論文を執筆する予定となっている。

(3) 徳之島方言では、長年に渡って調査をしてきた浅間方言を取り上げ、多量のデータに基づいて「表層アクセント体系」の解釈を試みた。先行研究では、いずれも琉球方言の通例として2型アクセント、あるいは3型アクセントの「N型アクセント」としてきたが、少ないデータに基づくものか、抽象度の非常に高い分析によるものであった。

私の立場からの結論は、4つの形の対立と、1つの上げ核による位置の対立をもつ「多型アクセント」という解釈である。これまでに報告のない、かなり特異な体系で、今後、もう一段抽象度の高い解釈の可能性も検討する必要はあるものの、すべての研究がこれに基づいた上で展開すべき基礎を固めたものと考えている。

(4) 与論島方言は全集落を調べ、 $P_n=n+1$ であったり $P_n=n$ であったりの地域差はあっても、いずれも「多型アクセント体系」であることを明らかにした。これにより、従来の3型アクセント、2型アクセント、さらには1型アクセントもあるか、という説ははっきり否定された。

その中において茶花方言は、 $P_n=n$ の体系を保ちつつも、内部での対立が不鮮明になりかけている。型の減少を伴いつつ曖昧化とする従来の変化のタイプとは異なるプロセスで、これもまた新しい知見である。

(5) 基本的に3型アクセント体系と見られる与那国島方言については、話者が90代の後半の年齢になって思うような調査ができにくくなってはいるものの、類別語彙はもとより、ローレンス語彙、松森語彙、伝統的複合語、動詞活用形などについても調べ、それらの資料を公開した。

話者を変えて聞いた生産的複合語のアクセントは、複数のアクセント単位に分かれる「複数単位形」が非常に多く、北奥の青森市方言と類似する点があることが注意を引く。

(6) 上記の琉球諸方言に本土諸方言もいくつか加え、伝統的複合語と生産的複合語における「式保存法則」(複合語とその前部要素との式の一致、あるいはそれから変化したアクセント特徴の一致)の有無に関して考察すると、大きく分けて、次の6つの類型があることが分かった。ここに、は広義の式保存が成り立つ(例外少なし)、は一応成り立つものの例外もある、×はほぼ成り立たない、

- は2単位形となることが多く、式保存検証の対象外であること、をそれぞれ表わす。ただし、同じ印の中がその度合いまで同じであることは意味しない。

	伝統的複合語	生産的複合語
鹿児島方言・		
京都市方言		
岩手県雫石方言		×
徳之島浅間方言・		
与論島麦屋方言		
喜界島中里方言	×	×
与那国島方言	×	-
青森市方言		-

(7) 沖縄久米島方言は7地点を調査中であるが、その内の4地点の基本的な調査の報告は1月に原稿を提出済みで、近く刊行の予定である。

その後も調査を拡大しており、例えば具志川方言は4拍語に少なくとも4種類の対立が見つかっており、3型アクセントの枠には納まらないことが分かっている。また、比嘉方言の生産的複合名詞においては、前部要素単独形の上昇位置を保存し、かつそれが語頭にある時は2度の下降が実現するという顕著な傾向が認められるなどの成果が得られており、さらに調査・分析を進めて発表を予定している。

(8) 琉球方言祖体系に関しては、そのA類、(すなわち、2拍名詞で言えば第1類と第2類に対応するもの)は、「下降式音調」を持っていたと考えるのが最も合理的であると判断する。その結果、私の提唱する下降式音調は日本祖語まで遡るものであると見ることになる。

(9) 以上の琉球方言が調査成果の中心であったが、本土方言についても、たとえば、青森県八戸市、弘前市、五所川原市、つがる市、岩手県盛岡市、愛媛県松山市などを調査した。追ってこれらの資料を公開する予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

(1) 上野善道, 「喜界島方言のアクセント資料(1)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 5巻, 2013, 121-154.

DOI: 10.15084/00000507

(2) 上野善道, 「喜界島方言のアクセント資料(2)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 6巻, 2013, 183-216.

DOI: 10.15084/00000517

(3) 上野善道, 「琉球与那国方言のアクセ

ント資料(3)」, 『琉球の方言』, 査読有, 38巻, 2014, 69-92.

http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/11831/1/ryukyu_38_uwano.pdf

(4) 上野善道, 「与論島方言のアクセント資料(1)」, 『南島文化』, 査読有, 36巻, 2014, 79-99.

(5) 上野善道, 「喜界島方言のアクセント資料(3)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 7巻, 2014, 289-310.

DOI: 10.15084/00000536

(6) 上野善道, 「徳之島浅間方言のアクセント資料(1)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 8巻, 2014, 141-175.

DOI: 10.15084/00000547

(7) 上野善道, 「琉球与那国方言のアクセント資料(4)」, 『琉球の方言』, 査読有, 39巻, 165-193.

http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/11803/1/ryukyu_39_uwano.pdf

(8) 上野善道, 「フンイキ>フィンキの変化から音位転換について考える」北海道方言研究会40周年記念論文集『生活語の世界』, 査読無, 6巻, 2014, 8-16.

(9) 上野善道, 「与論島方言のアクセント資料(2)」, 『南島文化』, 査読有, 37巻, 2015, 87-101.

(10) 上野善道, 「徳之島浅間方言のアクセント資料(2)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 9巻, 2015, 177-205.

DOI: 10.15084/00000467.

(11) 上野善道, 「喜界島方言のアクセント資料(4)」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 10巻, 2015, 265-295.

DOI: 10.15084/00000818

(12) 上野善道, 「琉球与那国方言のアクセント資料(5)」, 『琉球の方言』, 査読有, 40巻, 2015, 71-105.

(13) 上野善道, 「与論島方言のアクセント資料(3)」, 『南島文化』, 査読有, 38巻, 2016, 159-178.

[学会発表](計 3 件)

(1) 上野善道, 「N型アクセントの諸相総論と各論(喜界島・与論島方言)」, 日本音声学会第27回大会, 招待講演, 金沢大学, 2013.09.29.

http://www.psj.gr.jp/jpn/annual-convention/27th_2013

(2) 上野善道, 「標準語との接触による方言アクセントの変化」日本言語学会第147回大会, 招待コメンテーター, 神戸市外国語大学, 2013.11.24.

<http://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/147/LSJ147Program-J.pdf>

(3) 上野善道, 「日本語の三型アクセント原理と歴史」, 日本音声学会第29回大会, 招待コメンテーター, 神戸大学, 2015.10.04.

http://www.psj.gr.jp/jpn/annual-convention/29th_2015

〔図書〕(計 2 件)

(1) 上野善道, 「徳之島浅間方言の名詞アクセント体系」, 田窪行則・ジョンホットマン・平子達也編『琉球諸語と古代日本語』, くるしお出版, 査読有, 2016, 209-234.

(2) 上野善道, 「与論島諸方言のアクセント調査報告」, 木部暢子編『与論方言・沖永良部方言調査報告書』, 国立国語研究所, 査読有, 2016, 23-61.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野善道 (UWANO, Zendo)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号: 50011375

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: